

# クレーン倒壊 風速50m超か

## 高浜の事故 関電想定外

関西電力高浜原発（福井県高浜町）で大型クレーンが倒れ原発の建屋を直撃した事故で、現場周辺では瞬間風速50m超える風が吹いていた可能性があることが、九州大応用力学研究所の内田孝紀准教授（風工学）の解析で分かった。関電は事故後の会見で「二〇〇mほどの風は考えていた」と説明していたが、現場付近の上空は大幅に風が強まる特徴があったとみられ、原発の安全管理を巡る想定甘さが問われそうだ。

（中崎裕、山谷柁裕）

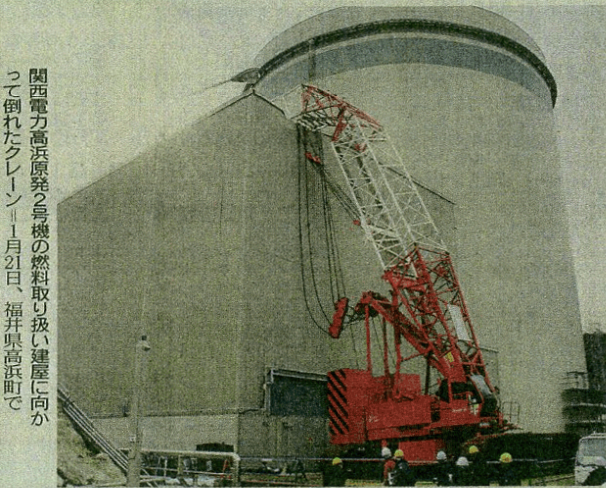
### 九大准教授が解析

試算は内田准教授が開発し、風力発電施設の建設などに活用されている局地的な風を解析する「シミュレーションソフト」「リアムコンバクト」を活用。国土地理院が五ヶ所四方で公表している標高データと、気象庁や関電の観測記録を基に、地形による風の流れを計算して現場の風速をほしき出した。

これによると、2号機建



屋脇で倒れたクレーンの先端付近（上空約百五m）の内田准教授の資料をもとに作成



関西電力高浜原発2号機の燃料取り扱いは建屋に向かつて倒れたクレーン1月21日、福井県高浜町で

瞬間風速は最大五・一倍では三倍以上の強さになったと算出された。関電によると、原発構内の敷地西側に設置している風速計（高さ九m）では一五mを観測していたが、クレーンの上空

高浜原発は、半島を東西に貫くように建設され、北側と南側を山に囲まれている。北側の山の南端にある

1、2号機付近は、海からの風と山を回り込んできた風が重なって、風が増幅される地形的特徴があるとい

い、内田准教授は「地形だけでこれだけの風になった。下の方も50mほどの風との結果が出ており、建物にぶつかってさらに複雑です」と指摘する。

事故では、関電側が大型クレーンの取扱説明書に書かれた暴風時の待機方法を守っていないかという疑いも浮上している。説明書では風速30m超の強風が予想される場合、クレーンを風下に向けて地表に倒しておくよう求めているが、関電側はクレーンを風上に向け、伸ばしたまま重りて固定する方法で待機させていた。

事故が起きた一月二十日、福井地方気象台は暴風警報を出し、最大瞬間風速三五mの北風が吹く恐れがあるとして注意を呼び掛けている。

関電の岩根茂樹社長は三十一日の記者会見で「現在どういう状況で、どういう認識で、どういう作業をしたかを含めて原因究明と対策を進めているので、その時点でしっかりお答えしたい」と述べた。